

意味再構成理論の現状と課題
——死別による悲嘆における意味の探求——
Meaning Reconstruction Theory:
Perspectives and Future Approaches

川島 大輔

国立精神・神経センター

Meaning Reconstruction Theory:
Perspectives and Future Approaches

Daisuke Kawashima

National Center of Neurology and Psychiatry

Grief processes after bereavement, as depicted by the classic stage model, have been criticized for lacking empirical evidence, simplifying the recovery process, and disregarding the cognitive and behavioral aspects of grief. New grief theories have been developed by a number of scholars aiming to explicate the productivity and multiplicity of grief processes. In particular, recent research has focused on the human ability to find benefits in, and experience growth through, loss. In this article, meaning reconstruction theory is set out and discussed.

First, problems of the classic stage model are overviewed, and the features of new grief theories are discussed. Second, meaning reconstruction theory is proposed as a way of elaborating the unique and dynamic

processes of making meaning from loss. Furthermore, some unresolved problems associated with the theory, as well as future research directions, are discussed in the light of theoretical and methodological issues.

Key words: meaning reconstruction, grief, bereavement, sense making, benefit finding, identity change

1. 死別による悲嘆に関する心理学的研究のこれまでの動向

1-1. 悲嘆の標準的モデルの特徴

Freud (1917/ 1970) による『悲哀とメランコリー』は死別研究の古典としてしばしば言及されるものであるが、そこでの見解、すなわち喪失した対象に注ぐ感情のエネルギーを徐々に減少させ、次第に新たな関係にエネルギーを投じるようになるという普遍的で一般的な、私的なプロセスとしての悲哀の標準的モデルは、以後の悲嘆 (grief) 理論の試金石とみなされてきた (Hagman, 1995; 2001)。また悲嘆研究分野の基礎を築いた Lindemann (1944) は、アメリカ東海岸ボストンのココナッツ・グローブ・ナイトクラブで起こった火災で死亡した家族らの悲嘆反応について研究し、「ショックと不信」「激しい悲嘆」「和解」の3つの段階を呈示した (Attig, 1996/ 1998; Neimeyer, 2002/ 2006)。さらに Kübler-Ross (1969/ 1998) によって提唱された、死にゆく過程の段階説、すなわち「否認と孤立」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」という5つの特徴的な段階を辿るという説は、死へのプロセスには様々な段階があることをはじめて研究によって明らかにしたといわれ (Kastenbaum, 2000)、死別による悲嘆プロセスの段階説としても採用されるようになった。

その後、標準的モデルに、生理学的な基盤をもつプロセスであるとの考えが付け足され、多くの研究者によって疑う余地のない事実として受け入れられたため、悲哀の理論家たちの主な関心は、長年これらの段階の本質および量の同定に注がれた（Hagman, 2001）。実際、それ以降、提唱された死別による悲嘆の段階理論はリンデマンとロスの理論の組み合わせや、ヴァリエーションにすぎないとも言われている（Neimeyer, 2002/2006）。

1-2. 標準的モデルに対する様々な批判

こうした標準的モデルに対し、様々な批判がなされるようになる。それらを整理すると次のようなものが挙げられる。第一に、一般的で直線的な回復モデルへの批判である。つまり悲嘆の過程は最終的に回復の状態に到達することなどあり得ず（Neimeyer, 2002/2006; Neimeyer, Keesee, & Fortner, 2000）、悲嘆の行為から完全に自由になることもない（Rosenblatt, 1996）。それにもかかわらず悲嘆の回復を目指す直線的モデルは、死別直後の悲嘆反応から段階的に回復に至るという認識を助長しているのである。第二に、故人との絆を断ち切ることに對する批判である。伝統的な標準的モデルでは喪失対象との関

係性をいつまでも維持することは、未解決の悲哀に悩む、病的悲嘆として扱われる。しかし故人と遺されたものとの絆は様々な形で継続する (Klass, Silverman, & Nickman, 1996)。むしろそうした「絆の切断仮説」 (breaking bonds hypothesis : Stroebe et al., 1992) そのものが、近代以前の遺物に他ならない。第三に、個人内部のプロセスへの偏りである。フロイトは悲哀に対し、具体的特徴と力動性を有した私的な心理学的プロセスという見方をはじめて明確に示した点では評価される。一方でそうした悲嘆を個人の私的なプロセスに還元することは、社会や文化の影響を度外視した「心理学的還元主義」 (psychological reductionism : Thompson, 2002, p.3) を助長する危険性も包含している。第四に、悲嘆反応における感情的側面への過剰な重視に対する批判である。従来 of 理論家は往々にしてグリーフワークの認知的・行動的な適応を度外視し、感情面にばかり注目する傾向がある (Neimeyer, 2001a; 2002/2006)。第五に、死別による悲嘆において個々人の選択の余地が皆無であり、それにただ無力に従うものとする考えを助長するという点で、標準的モデルは非常に誤解を招きやすい (Attig, 1996/1998)。

これら悲嘆研究における古典的・標準的モデルへの様々な批

判を通じて、近年多くの新たなモデルが呈示されてきている（e.g., Attig, 1996/ 1998; Janoff-Bulman, 1992; Klass et al., 1996; Stroebe & Schut, 1999; 2001）。そしてこうした新しい理論の共通要素として、①適応パターンの複雑性の重視、②故人との象徴的な絆の維持、③認知的過程の重要視、④死別による悲嘆が当事者の自己認識にもたらす影響、⑤トラウマ体験後の成長、⑥個人的な体験と家族や周囲のグループとの社会的相互的体験としての悲嘆、が挙げられる（Neimeyer, 2001a; 2002/ 2006）。

2. 意味再構成理論とは何か

2-1. 意味再構成理論の基本的前提

意味再構成理論（Meaning Reconstruction Theory : Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002）は、人間は人生の目的や生きる意味を見出したり、創造したりする心理学的欲求に突き動かされており、それ故どのような体験にも何らかの意味を探り出す存在であるとする構成主義の立場から、標準的モデルにおける問題および、死別による悲嘆についての認知、トラウマ、愛着の諸理論を再構成した悲嘆の新しい理論である。

そして「喪失に対する意味再構成は悲嘆における中心的なプロセ

スである」 (Neimeyer, 2002/ 2006) ことをその基本概念とする (Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer, 2001a; Neimeyer, 2002/ 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。こうした意味の再構成を悲嘆プロセスの中心に位置づけるという、基本的前提は多くの理論家や臨床家からの賛同を得ており (e.g., Neimeyer, 2001a; Neimeyer & Raskin, 2000; Stroebe & Schut, 2001), 悲嘆と喪失の研究も死別者が親しい人を失った後にどのように意味を探し求めるのかについて取り組み始めてきている (Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer, 2001a)。なお意味再構成理論は、死別以外にも離別や失業などの様々な喪失に対して有益な視座を提供するものであるが (e.g., Neimeyer, 2002/ 2006), ここでは愛する人との死別を中心に扱う。

2-2. 意味の意味

意味再構成理論における「意味」とは、自己や世界に対するものの見方や、人間の行動を規定する構成 (constructs) であるとともに、意味の探求 (search for meaning) から意味の生成 (meaning-making) に至る意味再構成のプロセスそのものである。以下具体的に説明する。

(1) 構成としての意味

意味再構成理論では，人間が自己や世界を理解するための構成，つまり意味構造（meaning structures）を保持しており，我々はそれに頼って行動を起こしたり，将来を予測したり，また人生のさまざまな出来事を解釈すると考える。これはパーソナル・コンストラクト（personal constructs：Kelly, 1955）や想定世界（assumptive worlds：Janoff-Bulman, 1992）といった概念と同義である（Gillies & Neimeyer, 2006）。また Gillies and Neimeyer（2006）が述べるように，この意味構造は「日々の活動や優先順位」「自己知覚」「対人関係」「未来に対する見方」「世界に対する見方」「信仰やスピリチュアリティ」の6つの領域からなり，単に意味づけ（meanings）と表現することもできる。

ただしその構造は，常に安定したものではなく愛するものとの死別などの危機的状況に直面した際に大きく揺らぎ，あるいは崩壊する。とくに死別はその構造の秩序や一貫性に対する危機であり，喪失が深刻であればあるほど，より根本的な再構成がなされる（Gillies & Neimeyer, 2006；Neimeyer, 2001a；2002/ 2006；Neimeyer & Anderson, 2002）。

(2) プロセスとしての意味再構成

喪失という危機的状況に直面して意味構造が大きく揺らいだり，

崩壊した際に，意味が探し求められる（Thompson & Janigian, 1988）。この意味探求を受けて死別者が従事するのが，後述する意味理解，有益性発見，アイデンティティの変化からなる意味生成の3つの活動（activities）である。なおこの意味再構成プロセスでの「意味」（meaning）とは，喪失後の人生における生きる意味や目的，あるいは構成の秩序や一貫性であり，意味構造や意味づけとは区別される。

また図1に示されるように，愛するものとの死別を受けた意味再構成は2つのプロセスに分かれる。つまり死別後に遺されたものはそれまで構築してきた意味構造にその悲劇を同調させるか，あるいは自らが直面している，以前とは大きく変ってしまった現実に適するよう意味構造を調整する（Neimeyer & Anderson, 2002）。これは同化（assimilating）と調節（accommodate）とも言い換えられる（Neimeyer, 2005-2006）。

そして喪失前の意味構造と一致させることができる場合には苦痛は低く，意味構造はより頑強なものとなる（同化）。他方，喪失前の意味構造と一致せず苦痛が増加した際には，意味が探し求められ，生成される。そしてこの活動が喪失前の意味構造に作用することで新しい意味構造に再構成される（調整）。この意味生成活動によって再構成された意味構造が喪失の苦痛を和らげる際には新しい意味構

図 1

造として結束するが，そうでない場合はさらなる苦痛の増加を招くため，再び意味が探し求められる（Gillies & Neimeyer, 2006）。

なお意味再構成のプロセスにおいて苦痛は二重の役割を担う（Gillies & Neimeyer, 2006）。つまり一方では苦痛が生じることによってはじめて意味が探し求められるため，苦痛は意味再構成プロセスの誘因と考えられる。他方，苦痛は新たな意味づけによって軽減される対象でもある。

（3） 意味生成の 3 つの活動

意味再構成理論では，喪失に対する反応として意味を再構成する際，人間は意味了解（sense making），有益性発見（benefit finding），そしてアイデンティティの変化（identity change）の 3 つの主要な活動に従事すると考える（Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002）。

意味了解は，喪失の原因を理解することで，死別によって揺らいだ意味構造の秩序や一貫性を修復しようとする活動である。たとえば「タバコを毎日のように吸っていたから，肺ガンで死んだ」と亡くなった理由を故人の行動パターンの結果として理解することや，「神様があまりにもこの子が可愛かったので，天国に連れて行った」と元々抱いていた宗教的信念に帰属させることである（Davis,

Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998; Davis et al., 2000; Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。この意味理解は、理解可能なものとしての意味 (meaning as comprehensibility : Janoff-Bulman & Frantz, 1997) と言い換えられる (Davis et al., 1998)。

有益性発見は、死別によって愛する人を失うという辛い経験にもかかわらず、そこにポジティブな含み (positive implication), あるいは明るい面 (silver lining) を見出そうとする活動である (Davis et al., 1998; Davis et al., 2000; Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。たとえば死別の経験を通じて、「家族の絆が強まった」あるいは「見通しを得られた」など、そこに新たな価値や意義を見出す活動である。これは Frankl (1946/ 1956) が述べるところの意味と類似しており、意義としての意味 (meaning as significance : Janoff-Bulman & Frantz, 1997) と言い換えられる (Davis et al., 1998)

そしてアイデンティティの変化は、自己や社会的世界の潜在的な価値や生きる目的を再発見すること、あるいは一変した世界での新しい役割を試みることである (Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。またアイデンティティの変化は、Attig (1996/ 1998) による、自己やアイデンティティという織物を編み直す「自

己の学び直し」(relearn the self) と, 故人のいなくなった世界で生きるすべを学ぶ「世界の学び直し」(relearn the world) とも言い換えられる (Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。さらに身近な他者との死別は苦しく辛い経験であると同時に, 自己の成長や発達 of 契機となる (e.g., やまだら, 1999; やまだら, 2000)。したがってアイデンティティの変化によってトラウマ後の成長 (post-traumatic growth : Calhoun & Tedeschi, 2006; Tedeschi, Park, & Calhoun, 1998) という好ましい結果がもたらされることもある (Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。

3. 意味再構成理論に関する諸研究の現状

ここでは 3 つの意味生成活動について, その実態, 内容, 苦痛との関係, そして関連要因について整理する。なお意味再構成理論に関連する本邦での研究報告は乏しいため (e.g., 坂口, 2002; 渡邊・岡本, 2005), いくつかの先行研究を紹介しつつ, ここでは主として欧米での研究知見を整理する。

3-1. 意味了解

Davis et al. (1998) はホスピス患者の家族に対する縦断研究を

行い，死別から6ヶ月後および13ヶ月後において死別者の68%が死を理解していたと報告している。また Neimeyer らによる大学生に対する研究では，意味了解の程度を「全く感じない」から「強く感じる」の4段階で評定しており，平均得点が3以上と，意味了解が顕著に見られることを報告している (Currier, Holland, & Neimeyer, 2006; Holland, Currier, & Neimeyer, 2006; Neimeyer, Baldwin, & Gillies., 2006)。一方で，すべてのものが意味了解に従事するとは限らないことも指摘されている。たとえば Schwartzberg and Janoff-Bulman (1991) は，親を亡くした大学生に対し質問紙とインタビューによる調査を実施し，死別から3年を経過しても「なぜ？」という問いに対する答えを見つけられたものが半分程度であったことを報告している。また事故や殺人などの暴力的な死を経験した人は，意味了解が困難であることも報告されている (Davis et al., 2000, Lehman, Wortman, & Williams, 1987; Murphy, Johnson, & Lohan, 2003)。たとえば自動車事故によって配偶者あるいは子どもを失った人に対して調査を実施した Lehman et al. (1987) は配偶者と死別した68%および子どもと死別した59%が，全くあるいはほんの僅かしか死を理解できなかったと報告している。

意味了解の内容について，たとえば Davis et al. (1998) は「死が何らかの形で予測できた」「家族成員の人生に対する見方と一致し

ていた」「宗教的あるいはスピリチュアルな（死後についての）信念が意味を提供した」の3つが典型的に見られたと報告している（Davis, 2001; Davis & Nolen-Hoeksema, 2001）。ただし意味了解の内容が必ずしも肯定的なものとは限らず（Chan et al., 2005; Gamino & Sewell, 2004）、たとえば事故や殺人、自殺によって子どもを亡くした親に対する調査を実施した Murphy et al. (2003) は、「死の不公平さ」「死についての情報や説明を求める」「得られた情報に基づく原因帰属を行う」「死の責任についての自問」という肯定的内容と否定的内容の両方を含んだ4つのカテゴリーを提示している。今後はこうした多様な意味了解の内容を同定することが求められる。

意味了解と苦痛との関連については、意味了解が苦痛を和らげることが報告されている（e.g., Currier et al., 2006; Davis et al., 1998; Holland et al., 2006）。たとえば McIntosh, Silver and Wortman (1993) は、乳幼児突然死症候群（Sudden Infant Death Syndrome: SIDS）によって子どもを失った親124名に対するインタビュー調査を実施し、意味了解が3週後の苦痛の軽減に影響すると報告している。一方で、意味を見出せないものが極めて強い苦痛を示すとの報告（Lehman et al., 1987）や、むしろ意味を探し求めないものの方が苦痛の程度が低いとの報告（Davis et al., 2000）も

ある。この結果の不一致は、苦痛が二重の役割を担うことと関連していると思われる。すなわち既に述べたとおり、苦痛は意味探求の誘因であると同時に、意味再構成の結果軽減されるものであるが、これまでの研究はこうした両者の関係性が時間をおってどのように変化するのかについてほとんど明らかにしてこなかった。そしてそのことが結果の不一致を引き起こしていると考えられる (Gillies & Neimeyer, 2006)。また苦痛の程度は意味了解の内容と関連することも考えられ、たとえば Downey, Silver and Wortman (1990) は SIDS によって子どもを失った両親の中で、子どもの死の原因を自分自身や他の人に帰属させる人は、神や偶然に帰属させる人よりも苦痛が顕著であると報告している。したがって今後は意味了解の詳細な内容と苦痛との関連にもっと目を向けるべきであろう。

意味了解に関連する要因として、たとえば Davis et al. (1998) は、高齢の親戚を亡くしたことで、スピリチュアルなあるいは宗教的な枠組みをあらかじめ持っていたこと、死別の数ヶ月前に大きな苦痛を示さなかったことが、6ヶ月後の意味了解の予測因子であると述べている。とくに宗教的信念については、故人が天国や浄土などのより良い場所に逝き、そこでいつか再び出会えると理解することも、死別者の苦痛を和らげるという (Davis et al., 2000; 川島, 2007; 2008)。また故人との関係性も意味了解と関連し、たとえば

Neimeyer, and Baldwin, et al. (2006) は「継続する絆」(continuing bonds : Klass et al., 1996) と意味再構成プロセスとの関連について、意味了解の程度が低い場合に強い絆を示すことは、著しい苦痛を引き起こすと述べている。さらに既述のとおり、暴力的な死とより自然な死では意味了解の程度や内容が大きく異なるため、死の形態は意味了解の重要な関連要因であるといえる。ただし殺人や事故死などの暴力的な死を構成している要因には、突然性(suddenness)と暴力性(violence)という出来事に関連した要因(Currier et al., 2006)とともに、最後の状況(たとえば死に際の苦痛の程度)や犯人の反省の程度、また法的手続きの進展状況など(Davis et al., 2000)も含まれるため、こうした諸要因との関係性について詳細に検討していくことが必要である。

3-2. 有益性発見

人は愛する者との死別という極めて困難な体験において、そこから気づきや学びなどの何らかの有益な部分を見出すことが多数報告されている(e.g., Davis et al., 1998; Davis et al., 2000; Folkman, 1997; Janoff-Bulman, 1992; Milo, 1997; 坂口, 2002; Thompson, 1985)。たとえば Davis et al. (1998) は、死別から6ヶ月後および13ヶ月後において死別者の約7~8割が死別の経験に何らかの肯

定的な側面を見出していたと報告している。ただし有益性発見の程度を「全くない」から「非常にある」までの 5 段階で評定した際には平均得点が 3 未満であり、意味理解と比較してそれほど顕著な活動ではないとの指摘もある (Neimeyer, Baldwin, et al., 2006)。また意味理解と同じく、暴力的な死では有益性の発見も著しく困難であることが指摘されており、たとえば Murphy et al. (2003) は死別から 5 年を経過した時点においても 43% の両親が、暴力的な子どもの死に意義を見出す事が出来ないと報告している。

Davis (2001) や Davis and Nolen-Hoeksema (2001) によると、有益性発見は大きく「性格の成長」「展望の獲得」そして「関係の強まり」の 3 つの要素からなる。また本邦でも坂口 (2002) が、Davis らの面接調査を受け、癌で近親者を亡くした 227 名に対する質問紙調査を行っている。そして有益性発見尺度を作成し、因子分析の結果「いのちの再認識」「自己の成長」「人間関係の再認識」の 3 つの因子を見出している。さらに意味理解とは異なり、有益性発見は暴力的な死においても他の死別と同様の内容が確認されている (e.g., Murphy et al., 2003)。

有益性発見と苦痛との関連について、Davis et al. (1998) は死別後 6 ヶ月時点での有益性発見が 13 ヶ月後の、また 13 ヶ月の有益性発見が 18 ヶ月後の苦痛の軽減に影響すると報告している。一方

で Lehman et al. (1993) が肯定的な側面を見つけることは苦痛の緩和とは関連しないと述べているなど、結果は一致していない。この点については、意味理解と同じく、二重の役割を担う苦痛との関連が十分に検討されていない問題が関係していると推測できる。また坂口 (2002) が指摘するように有益性発見の内容によって適応への影響に差異が生じていることも考えられる。

有益性発見に関連する要因として、楽観主義・悲観主義が挙げられる (Affleck & Tennen, 1996; Davis et al., 1998; 坂口, 2002)。とくに Davis et al. (1998) によると、有益性発見は故人の年齢や宗教的信念とは関連せず、楽観主義的な傾向が有益性発見の程度を高めるといふ。ただし有益性発見の内容によって関連する要因も異なることが示唆されており、たとえば坂口 (2002) は自己の成長が楽観主義など死別者の内的要因によるところが大きいのに対し、人間関係の再認識は社会的サポートなどの死別者を取り巻く実際の人的環境が強く反映される傾向にあると述べている。したがって今後は有益性発見の内容についての詳細な検討に加えて、各内容にどのような要因が関連するのかを検討していくことが必要だろう。

3-3. アイデンティティの変化

アイデンティティの肯定的な変化として、たとえば Lehman et al.

(1993) は、4～7年前に自動車事故による死別を経験した94名の配偶者および両親のうち、74%が少なくとも一つ以上の肯定的な人生変化を語ったと報告している。また Richards (2001) はエイズ患者の男性パートナーと死別した人への継続的なインタビュー調査から、最終面接に参加した70名の77%がスピリチュアルな現象の出現や成長について語ったと報告している。加えてトラウマ後の成長に関する研究 (e.g., Park, Cohen, & Murch, 1996; Riley et al., 2007; Tedeschi & Calhoun, 1996) は近年とくに研究の蓄積が著しく、本邦においても死別経験が様々な成長をもたらすことが報告されている (遠藤, 2002; 東村ら, 2001; 戈木, 1999; 渡邊・岡本, 2005; 2006)。他方、否定的な変化も少なからず報告されており、Lehman et al. (1993) は少なくとも1つ以上の否定的変化を語ったものが44%いたことを報告している。つまり死別経験はアイデンティティの肯定的変化をもたらすこともあれば、否定的変化をもたらすこともあるといえる (Frantz, Farrell, & Trolley, 2001; Lehman et al., 1993; Neimeyer, Baldwin, et al., 2006)。

変化の肯定的内容として、たとえば戈木 (1999) は、小児がんによって子どもを亡くした母親を対象とした質的研究を実施し、母親たちの語りには「以前より強くなった」「価値観が変わった」「死が怖くなくなった」の3つの変化が表れていたと述べている。また

Tedeschi and Calhoun (1996) はトラウマ後の成長を構成する「他者との関わり」「新たな可能性」「個人的な強さ」「スピリチュアルな変化」「人生への感謝」「成長と苦痛」の 6 因子を報告している。他方、否定的な変化として、Lehman et al. (1993) は「砕け散った人生目標」「人生のはかなさに対する認識の高まり」「社会的孤立」「毎日をやり過ごす（たとえば将来計画を立てない）」「宗教性の低下や信仰の喪失」を示している。ただしこれらの内容は総じて死別者が報告した変化の内容であり、死別者自身も気づいていない変化や、意味を探し求める行為の側面 (Armour, 2003) にはほとんど注意が向けられていない。また Attig (1996/ 1998) による「世界の学び直し」、つまり故人との思い出が詰まった場所や事物などの物理的環境の学び直しや、家族やより大きな共同体の中での他者との関係の学び直しについて検討した研究は少数 (Armour, 2003; Frantz et al., 2001) を除き、ほとんど見あたらない。

アイデンティティの変化の程度は苦痛の程度と正の相関を示すが、肯定的なアイデンティティの変化は逆に苦痛を和らげる (Neimeyer, Baldwin, et al., 2006)。ただし、とくに成長と苦痛との関係については、苦痛が減衰する (Park et al., 1996)、成長と苦痛はともに上昇する (Calhoun et al., 2000)、無相関 (Cordova et al., 2001) と一致した見解が得られていない。したがってすべての人が成長を経

験するわけではなく，また成長があることは痛みや苦痛がないことを意味しているのではないことに注意すべきである（Calhoun & Tedeschi, 2001）。ただしこの結果の不一致にも他の意味生成活動と同じく，苦痛の二重性との関連について十分な検討がなされていないという問題が関係していると考えられる。

アイデンティティの変化の関連要因としては，まず死別による衝撃の大きさが挙げられる（Tedeschi & Calhoun, 1996）。それはアイデンティティの著しい変化がトラウマ的な混乱によって引き起こされるためである（Neimeyer, Baldwin, et al., 2006）。ただし衝撃の大きさには暴力的な死や子どもの死といった死の形態だけでなく，故人と死別者との関係性が強く影響する。つまりアイデンティティをどの程度脅かすかは，故人とのこれまでの愛着関係，故人と死別者との相互依存の程度，そして故人との関係性（たとえば故人の親や配偶者）において自分自身を定義づける程度にもよる（Davis et al., 2000）。たとえばこれまで故人との良好な愛着関係を築いてきた死別者の場合には，喪失の衝撃はそれほど大きなものではないかもしれない。一方で極端に故人に依存し，その関係においてのみ自分自身を定義づけてきた死別者の場合には，たとえ死そのものはトラウマ的でなくともアイデンティティを大きく変化させる程の衝撃を受けると考えられる。さらに死別後の故人との愛着関係の影響も

大きい。それは戈木（1999）が指摘するように、故人との関係性を再構成することは、アイデンティティの見つめ直しや成長のための、また物理的にその人のいない状況に適応するための重要な機会だからである。またとくに成長の予測因子として、有益性を発見すること、さよならをいう機会を持つこと、良い思い出を自然に持つこと、そして内発的なスピリチュアリティを報告することが挙げられている（Gillies & Neimeyer, 2006）。そして男性よりも女性の方が高い水準の成長を報告する傾向にあるという（Tedeschi & Calhoun, 1996; 渡邊・岡本, 2005）。しかし男女差が生物学的な差異に基づくものであるのか、それとも文化的環境やコーピング方略の差異によるものなのかについては未だ不明瞭であり（Calhoun & Tedeschi, 2001）、今後の研究蓄積が求められる。

4. 意味再構成理論の課題と今後の展望

これまで意味再構成理論を巡る理論的検討および実証的研究を概観し、またいくつかの課題についても触れてきた。最後に意味再構成理論の理論的問題について検討し、関連する方法論的問題を明示することで、今後の研究展開の方向性を示す。

4-1. 意味再構成の理論的問題

(1) 意味の概念的問 題

まず意味了解に関する問 題が挙げられる。つまり既述の理論的検 討や研究知見からは、「なぜ死んだのか？」という問いに対し、死 の原因を病気や神の意志などの何らかの説明によって了解しようと する試み（**making sense of the death**）が指摘されている。一方で 「亡くなった人の人生は何だったのか？」という問いによって表さ れる、故人の人生そのものの意味（**making sense of the life**）を了 解しようとする試みもあるだろう。とくに原因の同定が難しい死別、 たとえば暴力や自殺による死においては既述のとおり意味了解が困 難であるため、死の原因や形態を問うのではなく、故人の人生がど のようなものであったかを理解することの果たす役割が大きいと考 えられる。しかし、この故人の人生に対する意味了解については、 これまでほとんど考慮されていない。

また有益性発見とアイデンティティの変化の区別についての問 題が挙げられる。つまり理論上は、有益性発見を死別の経験を通じて 得た気づきや学びなどの喪失の明るい面を見ようとする意識的な活 動とし、アイデンティティの変化を肯定的側面と否定的側面の両方 を含み、また当人が意識している変化に加えて、意識していない様々 な変化を含むものとして区別している（Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002; Neimeyer, Baldwin, et al., 2006）。

しかし先行研究では両者は明確に区別されているとは言い難く (e.g., Affleck & Tennen, 1996; Davis et al., 1998; Davis et al., 2000; 坂口, 2002), 実際には, 人格の成長や他者の絆の強まり, そして新しいものの見方の獲得は, 有益性発見とアイデンティティの変化のいずれにも見られる (e.g., Davis et al., 1998; Davis et al., 2000; 坂口, 2002; Tedeschi & Calhoun, 1996)。こうした曖昧さは, アイデンティティの変化に関する問題, つまり本来十分な検討を行うべき否定的な変化や世界の学び直しなどの行為の側面 (Armour, 2003) に目を向けてこなかった問題から生じていると推察できる。今後, この概念上の揺れを解決していくことが求められる。

さらにその可能性が指摘されながら (Gillies & Neimeyer, 2006), 図 1 で示した意味再構成のモデル図に反映されていない重要な視点として, 意味を求めない適応的な人も存在することが挙げられる。

「二重過程モデル」(dual process model: Stroebe & Schut, 1999; 2001) では, 人は喪失に伴う感情の表現や喪失の理解を主たる目的とするグリーフワークなどの喪失志向的な (loss oriented) プロセスと, 生活の立て直しを目的として外部的な調整に集中する回復志向的な (restoration oriented) プロセスに, 交互に従事する。そのため喪失に対する意味了解や, 死別を通じた学びや気づきが常に探求されるわけではなく, 死の意味を探し求めず現実生活での諸事に

没頭するものは、回復志向的な対処方略をとっているといえる (Neimeyer, 2000)。むしろもっとも苦痛の程度が深刻になるのは、意味を探し求めたがそれを見出すことができなかつた人である (Davis et al., 2000; Neimeyer, 2000)。したがって今後研究を積み重ねていくことで、意味探求を行わない活動を包含した意味再構成モデルに再構築していくことが必要である。

(2) 社会文化的文脈の看過

意味は個人内プロセスにのみ還元されるのではなく、社会文化の影響や身近な他者との関わりを受けて再構成されるものでもある (Neimeyer, 2000; 2001b; Neimeyer, 2002/ 2006; Neimeyer & Anderson, 2002; Neimeyer et al., 2000)。これまでも死の意味構造のひな形を提供している宗教や文化に流布しているスピリチュアルな言説 (Davis et al., 2000; 川島, 2007; 2008) との関連について、多数の研究報告がなされている (e.g., Braun & Berg, 1994; Davis et al., 1998; 川島, 2007; 2008; McIntosh et al., 1993; Milo, 1997; Tedeschi & Calhoun, 2006)。一方でその多くが、意味了解の程度と宗教の有無との単純な関係性の把握や、死別者の語りに見られるスピリチュアルな意味づけの内容分類に終始しており、死別者が宗教や文化の提供する言説をどのように取り入れながら意味を生成す

るのかという、能動的な意味再構成プロセスについては十分な検討がなされていない。加えて、社会や文化の肯定的な影響が中心的に扱われ、その否定的側面が十分に考慮されていない。死の形態や故人との関係性が世間や特定の文化にとって受入れ難い場合には、差別や偏見等のスティグマが生じ、意味再構成のプロセスを阻害することもある。たとえば自殺や HIV 感染による死は多くの社会において未だ否定的な印象を伴う死の形態であるし、また愛人は死別を公に悲しむことを周囲には認められにくい関係性といえる。こうした死の形態や関係性は、意味再構成に重要な葬儀への参加や他者との悲しみの共有を困難にし、「公認されない悲嘆」(disenfranchised grief: Doka, 1989) をもたらす場合もある。しかしこうした社会文化と意味再構成の関係について検討したものは未だ少数である (Armour, 2003; Murphy et al., 2003)。したがって今後の研究では、社会や文化に流布するスピリチュアルな言説をどのように取り入れながら意味が再構成されるのか、またスティグマの影響がどのように意味再構成を阻害するのかに迫ることが必要であろう。

また意味は身近な他者との関わりを通じて再構成されるものでもある。とくに家庭内で個々人の意味づけが共有されるかどうかは意味理解や成長の程度と密接に関係する (Neimeyer, Prigerson, & Davies, 2002)。そしてその背景には、Nadeau (1998; 2001) が指

摘しているように家庭内においても意味再構成のプロセスが大きく異なるという問題が存在していると考えられる。また宗教や文化に流布しているスピリチュアルな言説も、家族や僧侶などの他者を媒介して死別者に影響を及ぼすものであり（川島，2008），こうした社会文化と意味再構成の関係を明らかにする上でも，身近な他者との関わりを無視することはできない。しかしながら，意味生成におけるこうした対人的な側面については，その重要性が指摘されつつも，これまで十分な配慮がなされていない（Armour, 2003; Gillies & Neimeyer, 2006）。

さらにこれまでに行われた研究の多くが，死別者本人がどのように意味再構成に取り組んでいるのかに着目する一方で，それが語られる場に身を置く研究者との相互の関係性には注意を払っていない。しかし死別者は，適切な質問をしさえすれば，彼ら自身の内部に保存している事実や経験の内容を提供してくれる，受動的な「回答の容器」（vessel of answers : Holstein & Gubrium, 1995/ 2004）ではない。むしろインタビューにおいても，また質問紙においても，語り手である死別者と聞き手である研究者が「協働で意味を構築」しているのである。したがって死別者の身近な他者との関わりと同時に，研究者との関わりを通じた意味再構成のプロセスに目を向けなければならない。無論，死別者と研究者との関わりは多様であり，

両者が能動的に意味再構成に従事することもあれば、研究者はなるべく死別者の語りに影響を与えないようにしながらその意味再構成の有り様を聞きだそうとすることもあるだろう。この研究者の志向性の違いは、方法論的問題について考察する際に改めて取り上げる。

以上より、意味再構成プロセスに関わる社会文化的文脈として、とくに社会文化に流布するスピリチュアルな物語やスティグマとの関わり、家族など身近な他者との関係性、そして死別者と研究者の相互関係について検討していくことが必要である。

(3) 生涯発達の視点の脆弱性

これまでの意味再構成理論に関連する研究では、意味生成活動の内容や関連要因などについて様々な検討がなされてきた。しかし意味生成の3つの活動が様々な要因と関わりながら、どのように探求され、展開し、そして収束するのかという意味再構成の発達の側面についての明確な視座はいまだ提供されていない (e.g., Davis et al., 2000; Gillies & Neimeyer, 2006)。それは意味再構成のプロセスは一生涯にわたるものとして提示されながら (Neimeyer, 2002/2006)、実際には多くの研究が死別から比較的短期間の悲嘆プロセスに焦点化しているからである。

具体的には、まず意味内容の発達プロセスを十分把握できていな

いという問題がある。既述のとおり，意味生成活動の内容には，時間の経過とともに何らかの変化が見られることが指摘されている。たとえば意味理解は，時間の経過とともに事実の描写や感情表現から実存的でスピリチュアルな内容に，また否定的な内容からより肯定的な内容に移行していくことが示唆されている（Murphy et al., 2003; Neimeyer & Anderson, 2002）。また長期的変化に目を向けると，死別経験について繰り返し同じ内容が語られながら，死別者にとってもっとも切実な主題については大きな変化がみられることも指摘されている（やまだら, 2000）。しかし研究の多くが意味生成を単純な達成の程度で測定しており，また死別から比較的短期間の悲嘆プロセスに焦点化しているため，どのような内容が時間を経てどのように変化するのかという，意味生成活動の詳細な発達プロセスはいまだ明らかになっていない。

また3つの意味生成活動が相互にどのような関係を有しながら発達するのかについても，一致した見解が得られていない。たとえば死別直後は喪失の意味理解が顕著に見られるが，時間の経過とともに有益性発見が主要な役割を担うとの報告（Davis, 2001, Davis et al., 1998; Davis et al., 2000）の一方で，意味理解こそが適応のもっとも強固な予測因子であり，また時間の経過は関係しないとの報告（Holland et al., 2006）もある。この問題には，既述の意味の概

念的問題と、長期的な発達プロセスに目を向けてこなかったという問題が関連している。

さらに、これまでは単一の死別経験後の比較的短期間での悲嘆プロセスに専ら関心が注がれていた。しかし生涯において死別を一度しか経験しないものはむしろ希であるため、意味再構成のプロセスとは、人生において経験する複数の死別における再構成プロセスである。そのため特定の死別において再構成された意味構造は、新たな死別を経験した際には再び危機に陥り、より強化されるか、あるいは再構成されるという循環的プロセスを辿ると考えられる。つまり人生の特定の段階における再構成は、それまでの構成の歴史と再構成される未来を包含したものである。然るに今後の意味再構成理論に基づく諸研究は、単一の死別経験後の悲嘆プロセスではなく、むしろ生涯にわたる複数の死別経験を通じた意味再構成プロセスに迫るべきである。

4-2. 意味再構成理論の方法論的問題

(1) 意味生成の結果とプロセス

上記の理論的問題と密接に結びつく顕著な方法論的問題は、意味生成を結果としてみるか、それともプロセスとしてみるかという問題である。

結果として得られる有益さや意味理解を重視する場合には、その達成の程度が強調される。その場合、たとえば有益性発見は、意味生成の結果あるいはその帰結として見られるものであり、ストレスに対する対処努力あるいはコーピング戦略としての有益性想起 (benefit-reminding) とは大きく区別される (e.g., Affleck & Tennen, 1996; 坂口, 2002)。一方で意味再構成理論においては、意味生成は達成というよりも活動であり (Neimeyer, 2000)、またそのプロセスは、サクセスフルな認知的適応 (Janoff-Bulman, 1989) や認知方略 (Thompson & Janigian, 1988) として説明される (Gillies & Neimeyer, 2006)。しかしながらこうした概念的整理にもかかわらず、意味再構成理論に関連するこれまでの実証的研究の多くは、「どの程度、故人の死を理解できるようになったか？」あるいは「どの程度体験を通じて学んだことや気づいたことがあると感じるようになったか？」という質問に対し、その程度をリッカートで評定することにより達成の程度を測定している (e.g., Currier et al., 2006; Davis et al., 1998; Holland et al., 2006; Lehman et al., 1987; McIntosh et al., 1993; Neimeyer, Baldwin, et al., 2006)。また結果としての意味生成に関しては研究の圧倒的多数が、それが苦痛や精神的健康とどのように関連するのかに焦点化してきた。しかしこうした諸研究は、Davis et al. (2000) が指摘するように死

別研究の重要な問題には答えていない。それはたとえば、意味生成が、喪失を思い起こさせるものに平然と向き合うことを可能にする指標や、新しい人生目標に投資することを可能にする指標とどのように関連しているのかという問題である (Davis et al., 2000)。また結果として意味生成を捉えることは、意味再構成プロセスを静的に捉えることであるため、生き生きとした発達の側面を掬い得ない。他方、意味生成をプロセスとしてみることに對しては実証的知見が不足しており、また悲嘆研究において長年議論されてきた徹底操作 (working through) などの他のプロセスと意味生成がどのように関連するのかという問題も未解決のままである (Davis et al., 2000)。

(2) 量的研究と質的研究

上記の結果とプロセスの問題は、研究アプローチの差異によるものとも考えられる。つまり死別後の経過時間や健康との関連を検討してきた量的研究では、調査時点における達成の程度が扱われる。一方で、悲嘆の新しい理論を構築してきた質的研究 (e.g., Neimeyer, 2001b; 2002/ 2006; Neimeyer et al., 2000) やセラピー場面における意味再構成の個性記述的な報告 (e.g., Neimeyer, Herrero, & Botella, 2006; Stewart & Neimeyer, 2001) では、意味生成のプロ

セスに焦点が当てられているのである。換言すれば、量的研究と質的（あるいは個性記述的な）研究では、意味の異なる側面を照射しているのである。したがって意味再構成理論の発展には、上記の研究アプローチの特徴を踏まえること、そしてどのような状況での意味再構成の有り様を描こうとしているのかという志向性を研究者が省察し、自覚的になることが必要不可欠である。

調査時点において語られる意味づけを、意味生成の結果として、その達成の程度を測定する場合には、おそらく量的アプローチが有効であろう。ただしその場合にも、既述の理論的問題点を解決しうる研究が求められる。つまり単純な横断的研究ではなく、死別後の適応の多様な構成要素を追跡する、縦断的かつ実験的デザインに基づく研究が必要である（Neimeyer, Baldwin, et al., 2006）。またこのアプローチにおいて、研究者は死別者の意味再構成プロセスに深く関与することはないと思われるが、それでも教示や研究者自身の理論的枠組みが死別者の回答にどのような影響を及ぼしたのか、またそれとは逆に死別者の回答によって研究者自身がどのような影響を受けたのかについて、省察を行うことが必要である。

一方で、意味をプロセスとして、その生成プロセスを掬おうとする場合には、おそらく質的アプローチが有効であろう。死別者が、現在を基点として、過去の回顧と未来展望の中で死をどう意味づけ

るかを明らかにすることは、量的アプローチでは難しいためである。ここから質的アプローチを用いた研究の今後の方向性として、死別者が、生涯にわたる様々な社会文化的文脈との関わりを通じて構成・再構成してきた意味を、研究者に対していかに語るのかに迫ることが考えられる。また質的アプローチでは、死別者と研究者が協同で意味再構成のプロセスに従事するものと捉える。そのため意味生成の文脈を丁寧に記述することで、死別者と研究者のどのようなやりとりを通じて意味が再構成されるのかというダイナミックな関係性を掬うことが必要である。さらにはその意味再構成プロセスが、死別者の語り、そして研究者の問いや認識にどのような影響を及ぼしたのかに対する省察が求められる。

5. 結び

本論文は、死別による悲嘆についての心理学的研究について、古典的理論の概要およびそれらへの批判、そして近年の動向を含めて概説した。その上で、死別による悲嘆についての新しい理論である意味再構成理論に関し、その理論的前提、これまでの諸研究の現状、そして課題と今後の展望について検討した。

意味再構成理論は今後の死別研究に有益な展望を呈している一方で、今後の発展には複数の理論的・方法論的問題を解決す

る必要がある。とくに概念定義における不明瞭さ，社会文化的文脈の看過，そして生涯発達の視点の脆弱性という理論的問題は重大である。今後は，意味生成活動が，意味を探求しないという活動とともにどのように相互に関係しているのか，またその活動は社会文化や近しい他者からどのような影響を受けるのか，そしてそうした社会文化的文脈との関わりにおける意味再構成は生涯を通じてどのように発達するのかを明らかにしなければならない。

また意味生成を結果とみるか，プロセスとみるかがこれまでの研究では不明瞭であったという方法論的問題がある。理論的問題を解決しうる研究を展開するためには，どのような意味再構成の有り様を描出しようとしているのかについて十分に省察し，それに適した研究法を採用することが必要である。

文 献

- Affleck, G., & Tennen, H. (1996). Construing benefits from adversity: Adaptational significance and dispositional underpinnings. Journal of Personality, 64, 899-922.
- Armour, M. (2003). Meaning making in the aftermath of homicide. Death Studies, 27, 519-540.
- Attig, T. (1996). How we grieve: Relearning the world. New York : Oxford University Press. 林 大 (訳) (1998) 死別の悲しみに向きあう 大月書店.
- Braun, M. J., & Berg, D. H. (1994). Meaning reconstruction in the experience of parental bereavement. Death Studies, 18, 105-129.
- Calhoun, L. G., Cann, A., Tedeschi, R. G., & McMillan, J. (2000). A correlational test of the relationship between posttraumatic growth, religion, and cognitive processing. Journal of Traumatic Stress, 13, 521-527.
- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2001). Posttraumatic growth: The positive lessons of loss. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 157-172). Washington, DC: American Psychological

Association.

Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2006). (Eds.). Handbook of posttraumatic growth: Research and practice. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Chan, C. L. W., Chow, A. Y. M., Ho, S. M. Y., Tsui, Y. K. Y., Tin, A. F., Koo, B. W. K., & Koo, E. W. K. (2005). The experience of Chinese bereaved persons: A preliminary study of meaning making and continuing bonds. Death Studies, 29, 923-947.

Cordova, M. J., Cunningham, L. L. C., Carlson, C. R., & Andrykowski, M. A. (2001). Posttraumatic growth following breast cancer: A controlled comparison. Health Psychology, 20, 176-185.

Currier, J. M., Holland, J. M., & Neimeyer, R. A. (2006). Sense-making, grief and the experience of violent loss: Toward a mediational model. Death Studies, 30, 403-428.

Davis, C. G. (2001). The tormented and the transformed: Understanding responses to loss and trauma. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 137-155). Washington, DC:

American Psychological Association.

Davis, C. G., & Nolen-Hoeksema, S. (2001). Loss and meaning: How do people make sense of loss? American Behavioral Scientist, 44, 726-741.

Davis, C. G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. (1998). Making sense of loss and benefiting from experience: Two construals of meaning. Journal of Personality and Social Psychology, 75, 561-574.

Davis, C., Wortman, C. B., Lehman, D. R., & Silver, R. C. (2000). Searching for meaning in loss: Are clinical assumptions correct? Death Studies, 24, 497-540.

Doka, K. J. (Ed.). (1989). Disenfranchised grief: Recognizing hidden sorrow. Lexington, MA: Lexington Books.

Downey, G., Silver, R. C., & Wortman, C. B. (1990). Reconsidering the attribution-adjustment relation following a major negative event: Coping with the loss of a child. Journal of Personality and Social Psychology, 59, 925-940.

遠藤みち恵 (2002) 中年期健常者の親の死の受容と悲嘆のプロセス 心理臨床学研究, 19, 631-637.

Folkman, S. F. (1997). Positive psychological states and coping with severe stress. Social Science & Medicine, 45, 1207-1221.

Frankl, V. E. (1946). Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager. Wien: Verlag für Jugend und Volk. 霜山徳爾 (訳) (1956) 夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録 みすず書房.

Frantz, T. T., Farrell, M. M., & Trolley, B. C. (2001). Positive outcomes of losing a loved one. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 191-209). Washington, DC: American Psychological Association.

Freud, S. (1917). Trauer und Melancholie. 井村恒郎 (訳) (1970) 悲哀とメランコリー S. フロイト, 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) 自我論・不安本能論 フロイト著作集 6 (pp.137-149) 人文書院.

Gamino, L. A., & Sewell, K. W. (2004). Meaning constructs as predictors of bereavement adjustment: A report from the Scott & White Grief Study. Death Studies, 28, 397-421.

Gillies, J., & Neimeyer, R. A. (2006). Loss, grief, and the

search for significance: Toward a model of meaning reconstruction in bereavement. Journal of Constructivist Psychology, 19, 31-65.

Hagman, G. (1995). Mourning: A review and reconsideration. International Journal of Psycho-Analysis, 76, 909-925.

Hagman, G. (2001). Beyond decathexis: Toward a new psychoanalytic understanding and treatment of mourning. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 13-31). Washington, DC: American Psychological Association.

東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁 (2001) 死別経験による遺族の人間的成長 死の臨床, 24, 69-74.

Holland, J. M., Currier, J. M., Neimeyer, R. A. (2006). Meaning reconstruction in the first two years of bereavement: The role of sense-making and benefit-finding. Omega: Journal of Death and Dying, 53, 175-191.

Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). The active interview. Thousand Oaks: Sage. 山田富秋・兼子 一・倉石一郎・矢原隆行 (訳) (2004) アクティヴ・インタビュー——相互行為としての

社会調査 せりか書房.

Janoff-Bulman, R. (1989). Assumptive worlds and the stress of traumatic events: Applications of the schema construct. Social Cognition, 7, 113-136.

Janoff-Bulman, R. (1992). Shattered assumptions: Towards a new psychology of trauma. New York: Free Press.

Janoff-Bulman, R., & Frantz, C. M. (1997). The impact of trauma on meaning: From meaningless world to meaningful life. In M. J. Power, & C. R. Brewin (Eds.), The transformation of meaning in psychological therapies: Integrating theory and practice (pp.91-106). New York: Wiley.

Kastenbaum, R. (2000). The Psychology of Death. 3rd edition. London: Free association books.

川島大輔 (2007) 死者と生者を結ぶ物語——「浄土でまた会える」という意味づけを巡って—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 150-165.

川島大輔 (2008) 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ 質的心理学研究, 7, 157-180.

Kelly, G. A. (1955). A theory of personality: The psychology of

- personal constructs 1. New York: W. W. Norton.
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. L. (Eds.), (1996).
Continuing bonds: New understandings of grief.
Philadelphia: Taylor & Francis.
- Kübler-Ross, E. (1969). On Death and Dying. New York:
Macmillan. 鈴木 晶 (訳) (1998) 死ぬ瞬間――死とその過
程について 完全新訳改訂版 読売新聞社.
- Lehman, D. R., Davis, C. G., DeLongis, A., Wortman, C. B.,
Bluck, S., Mandel, D. R., & Ellard, J. H. (1993). Positive
and negative life changes following bereavement and their
relations to adjustment. Journal of Social and Clinical
Psychology, 12, 90-112.
- Lehman, D. R., Wortman, C. B., & Williams, A. F. (1987).
Long-term effects of losing a spouse or child in a motor
vehicle crash. Journal of Personality and Social
Psychology, 52, 218-231.
- Lindemann, E. (1944). Symptomatology and management of
acute grief. American Journal of Psychiatry, 101, 141-148.
- McIntosh, D. N., Silver, R. C., & Wortman, C. B. (1993).
Religion's role in adjustment to a negative life event:

- Coping with the loss of a child. Journal of Personality and Social Psychology, 65, 812-821.
- Milo, E. M. (1997). Maternal responses to the life and death of a child with a developmental disability: A story of hope. Death Studies, 21, 443-476.
- Murphy, S. A., Johnson, L. C., & Lohan, J. (2003). Finding meaning in a child's violent death: A five-year prospective analysis of parents' personal narratives and empirical data. Death Studies, 27, 381-404.
- Nadeau, J. W. (1998). Families making sense of death. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Nadeau, J. W. (2001). Family construction of meaning. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 95-111). Washington, DC: American Psychological Association.
- Neimeyer, R. A. (2000). Searching for the meaning of meaning: Grief therapy and the process of reconstruction. Death Studies, 24, 541-558.
- Neimeyer, R. A. (Ed.). (2001a). Meaning reconstruction and the experience of loss. Washington, DC: American

Psychological Association.

Neimeyer, R. A. (2001b). Reauthoring life narratives: Grief therapy as meaning reconstruction. Israel Journal of Psychiatry and Related Sciences, 38, 171-183.

Neimeyer, R. A. (2002). Lessons of loss: A guide of coping. New York: McGraw-Hill. 鈴木剛子（訳）（2006）＜大切なもの＞を失ったあなたに――喪失をのりこえるガイド 春秋社.

Neimeyer, R. A. (2005-2006). Complicated grief and the quest for meaning: A constructivist contribution. Omega: Journal of Death and Dying, 52, 37-52.

Neimeyer, R. A., & Anderson, A. (2002). Meaning reconstruction theory. In N. Thompson (Ed.), Loss and grief: A guide for human services practitioners (pp. 45-64). Basingstoke, UK: Palgrave.

Neimeyer, R. A., Baldwin, S. A., & Gillies, J. (2006). Continuing bonds and reconstructing meaning: Mitigating complications in bereavement. Death Studies, 30, 715-738.

Neimeyer, R. A., Herrero, O., & Botella, L. (2006). Chaos to coherence: Psychotherapeutic integration of traumatic

- loss. Journal of Constructivist Psychology, 19, 127-145.
- Neimeyer, R. A., Keesee, N. J., & Fortner, B. V, (2000). Loss and meaning reconstruction: Propositions and procedures. In R. Malkinson, S. S. Rubin, & E. Witztum (Eds.), Traumatic and non-traumatic loss and bereavement: Clinical theory and practice (pp. 197-230). Madison, CT: Psychosocial press.
- Neimeyer, R. A., Prigerson, H. G., & Davies, B. (2002). Mourning and meaning. American Behavioral Scientist, 46, 235-251.
- Neimeyer, R. A., & Raskin, J. D. (Eds.), (2000). Constructions of disorder: Meaning-making frameworks for psychotherapy. Washington, DC: American Psychological Association.
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. Journal of Personality, 64, 71-105.
- Richards, T. A. (2001). Spiritual resources following a partner's death from AIDS. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp.

173-190). Washington, DC: American Psychological Association.

Riley, L. P., LaMontagne, L. L., Hepworth, J. T., & Murphy, B. A. (2007). Parental grief responses and personal growth following the death of a child. Death Studies, 31, 277-299.

Rosenblatt, P. C. (1996). Grief that does not end. In D. Klass, P. R. Silverman, & S. L. Nickman. (Eds.), Continuing bonds: New understandings of grief (pp. 45-58). Philadelphia: Taylor & Francis.

戈木クレイグヒル 滋子 (1999) 闘いの軌跡—小児がんによる子どもの喪失と母親の成長 川島書店.

坂口幸弘 (2002) 死別後の心理的プロセスにおける意味の役割—有益性発見に関する検討— 心理学研究, 73, 275-280.

Schwartzberg, S. S., & Janoff-Bulman, R. (1991). Grief and the search for the meaning: Exploring the assumptive worlds of bereaved college students. Journal of Social & Clinical Psychology, 10, 270-288.

Stewart, A. E., & Neimeyer, R. A. (2001). Emplotting the traumatic self: Narrative revision and the construction of coherence. The Humanistic Psychologist, 29, 8-39.

- Stroebe, M. S., Gergen, M. M., Gergen, K. J., & Stroebe, W. (1992). Broken hearts or broken bonds: Love and death in historical perspective. American Psychologist, 47, 1205-1212.
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (1999). The dual process model of coping with bereavement: Rationale and description. Death Studies, 23, 197-224.
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (2001). Meaning making in the dual process model of coping with bereavement. In R. A. Neimeyer (Ed.), Meaning reconstruction and the experience of loss (pp. 55-73). Washington, DC: American Psychological Association.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress, 9, 455-472.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2006). Time of change? The spiritual challenges of bereavement and loss. Omega: Journal of Death and Dying, 53, 105-116.
- Tedeschi, R. G., Park, C. L., & Calhoun, L. G. (1998). (Eds.). Posttraumatic growth: Positive changes in the aftermath

- of crisis. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Thompson, N. (2002). Introduction. In N. Thompson. (Ed.), Loss and grief: A guide for human services practitioners (pp. 1-20). Basingstoke, UK: Palgrave.
- Thompson, S. C. (1985). Finding positive meaning in a stressful event and coping. Basic and Applied Social Psychology, 6, 279-295.
- Thompson, S. C., & Janigian, A. S. (1988). Life schemes: A framework for understanding the search for meaning. Journal of Social & Clinical Psychology, 7, 260-280.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005) 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16, 247-256.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2006) 身近な他者との死別を通じた人格的発達—がんで近親者を亡くされた方への面接調査から— 質的心理学研究, 5, 99-120.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川 学 (1999) 人は身近な「死者」から何を学ぶか—阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより— 教育方法の探求 (京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要), 2, 61-78.

やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美 (2000) 阪神大震
災における「友人の死の経験」の語りと語り直し 教育方法の探
求 (京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座紀要), 3, 63-81.

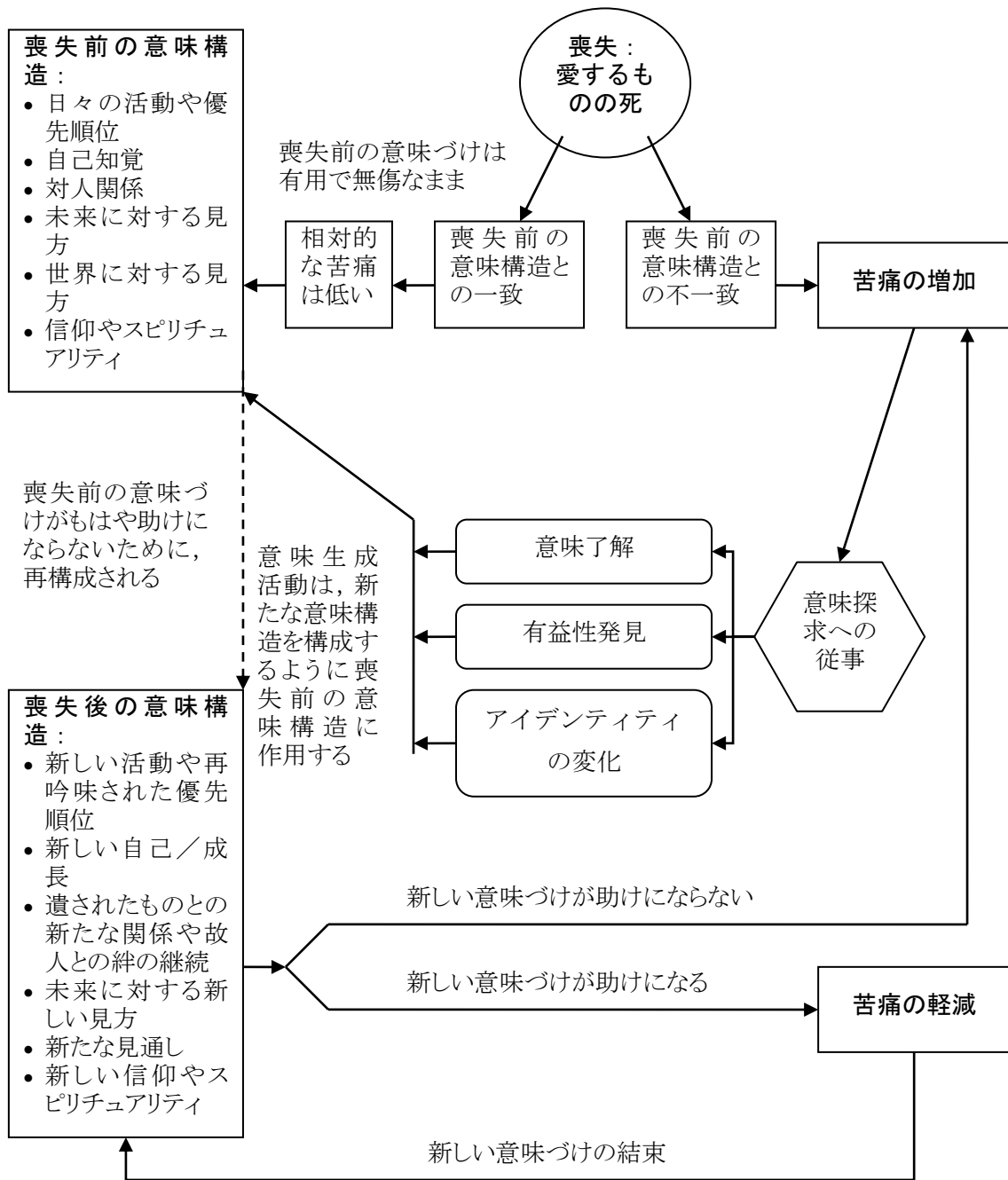


図1 愛するものの喪失を受けた意味再構成経路のモデル図
(Gillies & Neimeyer, 2006)